

酒(史)跡漫歩

沖野奈加志

季節もよくなつて、ときどきした。仕事休みに朝から酒屋へ浸り切りというのも、体にもよくないし、たまには二合ビン位とみにギリでも、つてぶらぶらしくしてみませんか。今日はお酒汁菜という二とすのこ、酒に關係あるところをちよつと歩いてみました。

酒で不賞をとつた本田出雲守

動物園の北側を天王寺の方へ坂を上つていくと一心寺がある。一心寺の南が春日山で、大坂夏の陣の徳川方の本陣があつたところだ。一心寺の北側の安居神社には豊臣方の真田幸村戦死處が建てられてあり、このあたりは当時の激戦の跡である。一心寺表門を入つて左側休憩所の南側に本

田出雲守忠朝の墓がある。大名の墓ともなれば墓園を城壁のように囲み、高さ三メートルもある五輪塔であるが、本田忠朝は、大坂夏の陣総攻めのとき酒をのんでいたため、一心寺の井戸の水を呑んでいて真田方に切りつけ、ついでにむべさは酒なり、今後我が墓に詣るもの口酒さらいとなるべしと無念の言葉を残したという。

ちよつとこのぞいてみたら何日本という飯レヤもじに、米酒、何下、何焼、などと書いたのがフリ下、こいる。酒を苦勞している人が多いんだなあと感ず。

また安居神社の南側の門を入ると、鈴ヶ坂になつていて事務所の裏側のあたりに井上伝之助という人の墓が、た墓がある。茶人で宗理と称し、息子さんか立てたもの

一心寺境内



月夜に念仏 靴履
となえる 履靴 履靴
履靴

らしいが、おしり事に最近、五代りのバッチ
と徳利の尖が二つ出ている。

月夜のしほしほ降る夜に
豆遣がとくくりも、之酒買いに
こん口明を思ひ出す楽しい墓を
す。

東高津の伝光寺にも酒樽の墓が
あるが、酒好宿業信士、安政とだ
けしかれからない。

伊豆七島は江戸時代から明治初
年頃までの流人島であつたが、三
マイル基礎の問題になつて、この新
島にある流人の墓に酒樽やアイコ
ロがあつた。二位と戻れぬ流人が
生存中に自分の好きな形のものを
彫り、江戸無宿何助、神田何吉等
と彫つておき、死後友人が年月
日を彫り込んだものだといふ。

俺は親不孝で死んでも帰る気がないから、
三由公園に一升徳利の碑を立てておこうかと

港区天保山の道楽塚

沖橋路の乗船場の手前、市バスがぐる、
と廻るロータリーの匝入のなかに、道楽塚
酒ふんな なかうたこうたご くらす一生
というのがある、て、手水鉢と地蔵さんのよう
なのが立つてゐるが、地蔵さんの形が男様で、
手水鉢のくぼみが女様らしい。いつも勤しい
花とワンカッブを見かけるが、世話する人が
あるんだろう。

天保の川ざらえの工でできた天保山は、春
は花見酒、夏は赤井酒、秋は甘見酒、冬は雪
見酒の四季の酒どころだ、た。

酒でもうけた鴻池 酒屋でこまごかわれた長町の酒屋

住吉区の住吉神社には約七百程の灯籠があ
るが、航海の神であるといふことと燈籠の殆
んどが航海関係のものがある。

この灯籠をみれば、江戸時代どのような
前物がどこからどこへ運んでいけたかよくわか
る。+江戸廻り酒物廻り船中、という灯籠が、
阪堺線沿い大鳥居と北参道の間にある。

江戸時代中頃までは馬で江戸まで酒樽を運
んで来たが、東海道へ京都三条大福から江戸
日本橋までが百二十八里、大阪から京都ま
で十三里、一日十里としても、天候などの都
合で十八日ぐらいはかかた。また当時は、
馬には三十隻(酒樽二丁)、人馬は五隻以上
は禁止されるという今の併走基準法よりよ、
何と人(馬)が守らされた。それ、当
時仲舟の酒造業であつた鴻池屋が船を運ぶ

ことを考えた。

前記の江戸廻り酒物というものは酒の他に
油、綿、その他運載の菱垣船というのである
が、後には酒専用の樽廻船というのできて
船も千石船へ四斗樽で二百五十個の八日位で
江戸に着いたという。

これが大もうけしたのが酒造屋で、このも
うけを元手に酒屋、大名貸などをした、今
日の酒造資本——三和銀行のはじまりである。
樽廻船のため、当時の東海道五十三次の宿
場の馬子たちが大勢失業し、各所で騒ぎが起
きたという。

江戸時代はいまの金十時の前身にあたる長
町の旅籠屋というのが、いまの日本橋四丁目
位から恵比須町あたりであったが、当時の長
町の日雇傭人は「カ役者」と言われ、米搗、
油敷、酒造などの仕事が多であったが、米搗
と酒造業者は長町の者を安く使、て困らせた
ので、町奉行所は度々取締りをしたが、米屋
と酒屋はあらためなかつたという。

東住吉区の酒造と云うところも種物の長柄
を朝鮮から伝え日本人の住みついたところを和
のことを買取というところから出た地名だと
いうが、この住道の中臣の御座神社に、
朝鮮から来た酒造の兄娘、衣織の姉嬢らの
もてなしたするの酒をつく、ヒツという伝
説がある。

梅田自由市濁酒の歌

民衆の酒濁酒は 守くて百くてまじる
トコチマニ 固く冷めまに 濁酒皆にに望む
高くつく日本酒は、税金が八割だ
専任者税務署よ 我らは濁酒守る

（民衆の魂永遠は、あの節を歌う）
日本に政府が三つあつたと言われれば時代、
マツカサの石巻軍部司令部、幣原喜十郎
の自由民政府、共産党の地下政府（？）
、國破れ之山河入り、昔の人はいいこと言
う。山河ありば人が住む、人が住めばものを

高麗人の売る美酒

近鉄電車でアバノから大和川をこえてしは
らくやくと思致荘という所がある。

ここは古代に領吉市という市の立ったとい
うので、古代史の文書のなかに、高麗（朝鮮）
人の来る美酒を人々が争って買求めたとい
うところであるが、古代史の真向家以外には
あまり知られていないようだ。

大坂の東区には古代の朝鮮から渡つてきた
人の跡が少しあるが、酒に關係のあると
ころを少し訪ねてみよう。

東住吉区鷹合町の「酒の若塚公屋」ここに
小ざな石境がある、こゝ、藝文酒之公塚とい
う碑がある。藝文は古代朝鮮から渡つてき
た氏族で、京都の太秦の酒の神社松尾神社と
いうのも藝文の氏神だというが、藝文酒之公
もこの衆の一族と思える。もとはこの近くに
酒屋神社というのもある。だが、今日どこかへ
合併されてしまつたらしい。

もう一飲むし、政府が三つもあれば生活はよ
くなるかといへば、こゝにあらす、三つもある
からどの政府も無責任な極まりなし。

当時の傭人組合のストローガンは「三合頭給
へせぬー一日米三合」既結してほしい。だつ
た。政府は二合一（三合を一ヶ月に三日
）七日位しか配給しない。

そこで、この政府の生活にもならず、米
ある者は米を、芋あるものを手を、あるもの
は何でも、何も無い女の人や女を売つて生活
を始めた。

政府、警察はこゝを領市という。アメコー
はフラックマーケ、トというが、黒い犬も
黒い芋でもない、もう方は銀シマールと喜んだ
ものだ。

ヤミ市はなれ、自由市だ。アラ、クじ
ないフリマーカー、トだ。物資がなくて戦争に
負け日本に、あるくよくもこれだけ日本
中至るところに自由市ができた。国鉄、私鉄
の駅という駅はくには必ず市がた、たもの

だ。大坂市内では、梅田、鶴橋、野田阪神、
天六、アベノなんが最大級のモオだ。三十年
後の今でもその名残りがある。

ドア酒屋はいつも満員だった。一人で行く
とビールピニに入、たのめが出る。何人がまど
まど行くとおも二へおぼさんへが一升、か二
升かきいてヤカニに入れもつてくる。

このドア酒が時々値上りすることがある。
経済統制とか、酒税法違反とかで警察、税
務署、アメリカ占領軍が取締り発令をする。

自由市場は国際市場でもあるので、警察も
アメ公もおさえられるところがある。それで
サングラスにアロハシャツの兄貴たちには、整
理をやらせた。TPOのふとという腕章をま
いた奴等かハバをきかていた。民衆の酒
ドアロウは、気分よくまわ、てきたとき
黄色と黒の荒い縞もよりの胸に虎の首のしし
ゆうが入ったのが、ちよつと顔色青せとイン
ネニつけてきた。

当六七、八人、向うも同敷位、お前らど

この若いもんや。お前さんね。
度はハニミンのタイガースや、ここらで大き
な顔さらすな。ワシらはマルキョー組や。
さいたことないなあ、親分は。トクテの
キョーイ干やんや。知らんなあ。虎の首は
青かして中するつもりだろうが、こちらはア
メ公や大坂警視庁へそういう時代もある、たし
相手にするぐらいだ。虎やん取つかはすれ
。まあこのへんはう千のシマヤから、よろ
しゅうたのむる、顔つなぎに飲み直そうと
いうことになつて、ケレン味に飲ましてもら
ったのはあとにも先にもこけきりだか、虎の
尻骨が、民衆の酒ドアロウは、の歌をおぼ
えとしきりに感心していやがった。
大坂マルビルなどという工地区金の連中や
が、た前に、梅田自由市場酒商會碑を
建て、。ここでは税金のかからぬ酒が売られ
ていました。と記録を残しておくべきではな
いだろうか。